

志摩幼保園高台移転事業設計業務に係る公募型プロポーザル講評

志摩幼保園高台移転事業設計業務
プロポーザル方式選定委員会

(1) 総評

志摩幼保園は南海トラフ地震の津波浸水想定区域内に立地すること、また園舎の老朽化と設備や機能が不十分であることから、早期の高台移転と同時に新しい園舎の建設が求められてきた。建築予定地である旧布施田小学校跡地は、近隣住民の避難場所に指定されていることから近隣住民の意向に加え、保護者や保育士・幼稚園教諭等の意見を十分反映させる必要がある。よって、本設計業務においては、経済的で質の高い建築物、長期的使用、市民や利用者の声を反映させた建物の実現に向けて、柔軟かつ高度な設計能力及び豊かな経験や発想を持ち、多様な視点から検討のできる設計者を選定するものである。

審査は2段階で実施した。第1次審査では、技術資料の提出のあった8者を、設計事務所と実施体制の評価、及び本業務への適応性の視点から5者に絞り込んだ。その後この5者に対して「事業目的に配慮した全体設計」(テーマ1)と、「基本コンセプトに配慮した園舎・園庭設計」(テーマ2)、「志摩市公共施設としての取り組み」(テーマ3)に関する技術提案を求めた。5者から技術提案書が提出され、これに対するヒアリングを行った。

テーマ1は、平常時と災害時の利用の違いに配慮した施設配置と動線、また災害時の対策を求めた。アプローチ道路からの車両動線と歩行者動線の考え方、また避難所としての検討の程度に違いが見られた。テーマ2では、子どもたちが安全に生活でき、円滑・快適に活動し生活できる施設配置に関する技術テーマである。園舎の形状について、囲み型、コの字型、への字型と各社の実績に基づき多様な提案がなされた。テーマ3では、コスト管理、環境配慮、将来の変化への対応、関係者の意見反映などを問うた。とりわけ、構造種別に対しては、各者の考え方によりRC造、鉄骨造、木造、またそれらの混構造と提案内容が多様であった。

全体的には、限られた時間の中で、実績に基づく具体的提案がなされた。ヒアリングにおける回答についても、技術的根拠を示しながら丁寧な回答がなされ、レベルの高い提案をしていただけたことに大いに敬意を表します。園児の生活や活動、災害時の地域住民の避難機能の視点から、敷地の土地利用計画と園舎の平面形状が全体計画を左右する重要な論点として議論のポイントとなった。設計候補者については、それらを総合的に配慮した技術提案を提示した点で高い評価を得たといえる。

(2) 個別講評

設計候補者＜提案者 3＞

敷地の南東側に園庭を包み込むようにへの字型の園舎を配置し、南側に大きく開かれた園舎と園庭が提案された。また既存体育館に並列させて遊戯室を配置することで、避難所としての機能を高めている。西側には北側アプローチ道路から直接侵入できる一方通行の駐車場と、園舎と接する部分に屋根のある通路を提案している。このことにより、日常時の安全な送迎動線と、災害時の体育館、遊戯室、駐車場が連携可能な機能を確保している。園舎としては全体の見渡せるへの字型平面、堅牢な RC 造、南北の通風と南面採光が十分確保された。また、設計プロセスにおけるワークショップの提案も具体的であった。全体を通じてバランスの良い提案がされ、高い評価を得た。

次点者＜提案者 1＞

敷地北東から西側にかけて、RC 造の幼稚園舎と保育園舎を L の字型に配置した。駐車場をアプローチ道路沿いと既存体育館の南側に確保し、使い分けに対応している。災害時の屋上利用可能な計画、避難時の受け入れ、時間経過ごとのシミュレーションなど特色ある提案が見られた。乳児用の小さな園庭を確保したり、子ども達の遊び環境や安全確保の工夫がされ、子どもの目線に立った配慮も優れている。また保育室の天井高を高くとり環境負荷を減少させる提案や、ラーメン構造の採用で将来の変更を容易にするなど、公共施設の設計にふさわしいものである。

＜提案者 2＞

敷地西側に、東に大きく開くコの字型園舎を配置している。北側には幼稚園、南側に保育園を設け採光を確保し、両者を連絡する位置にシンボリックな屋根のかかった遊戯室を配置した。園舎としては、トイレをコアとする保育室平面、発達段階にふさわしい大小 2 つの庭園など実績に基づく堅実な提案がなされた。また、将来の変化に備え、主構造を鉄骨造、小屋組を木造とする構造形式が示された。既存体育館南側と保育園南側に駐車場が確保されているが、送迎時の安全対策に疑問が残った。

＜提案者 4＞

敷地西側に、園庭を取り囲む口の字型の園舎を配置し、園児の安全を管理しやすい環境を提案している。既存体育館南側に駐車場をまとめて確保したことで、園児と住民利用のセキュリティラインを明確にしている。園舎の内側と南側に性格の異なる外部空間を設け、室内との境界に軒下の豊かな半屋外空間を用意するなど、内外のつながりのよい空間構成である。保育室は、大人と子どもの目線の違いに着目し安心感と視線を同時に確保できている。RC、木、鉄を部位ごとに適切に使い分け、シンプルな構法を提案した。地域に対して園舎が閉ざされた印象を与えるのではないかという懸念が示された。

<提案者 5>

中庭を取り囲む口の字型の園舎と、動的な遊びを可能とする広場を、敷地西側に配置した。災害時には広場、駐車場、既存体育館が一体となって機能する配置である。脱炭素に貢献する木造建築を提案し、温かな空間づくりを目指している。また、コンパクトな回廊型平面は職員動線の短縮と安全確保に寄与するものである。建設費用、維持費用を提言する工夫、設計に利用者意見を反映させるワークショップの提案も適切にされた。駐車場進入路の安全対策、木造の耐久性などについての懸念が指摘された。